

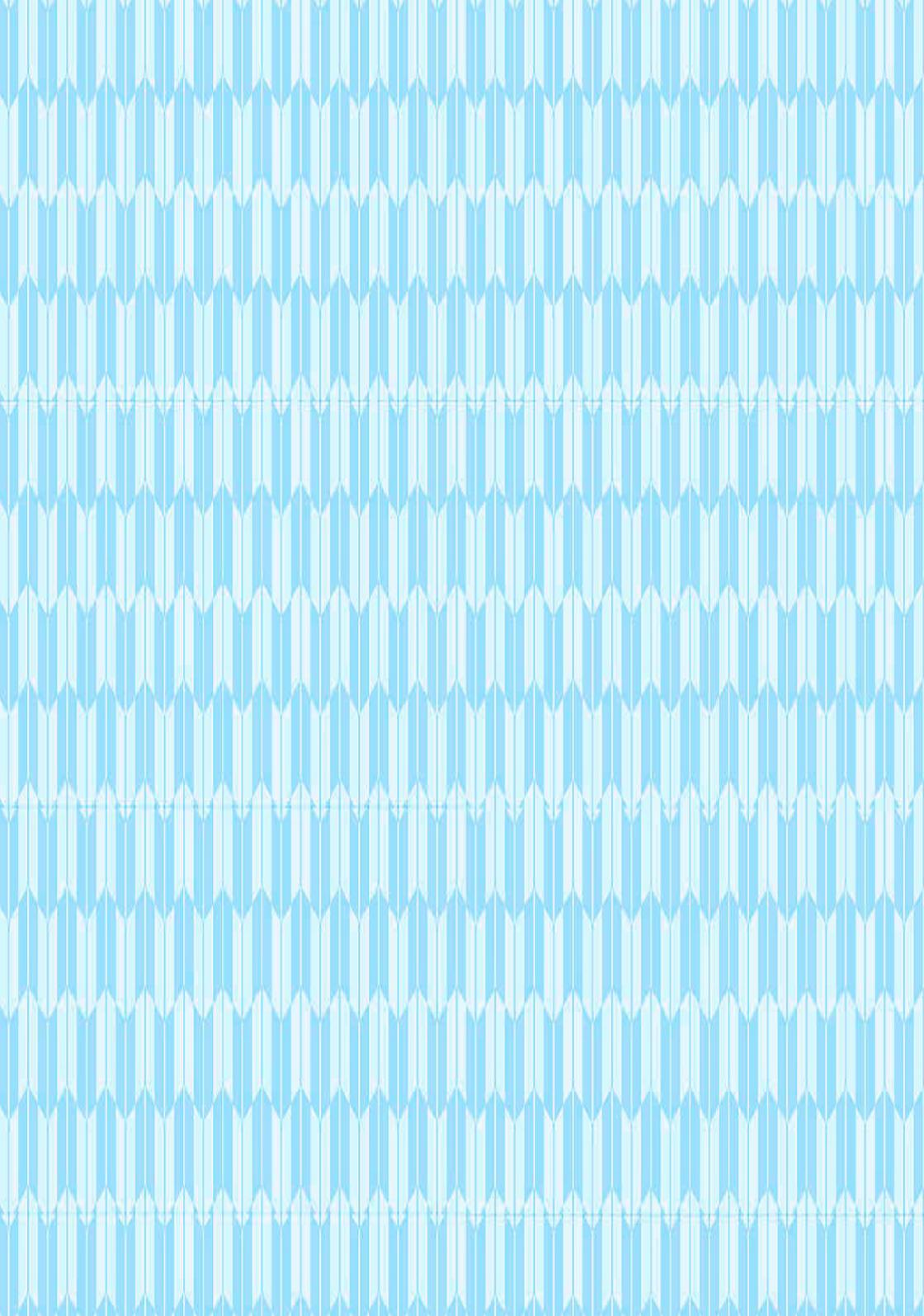
あそ

1

2025



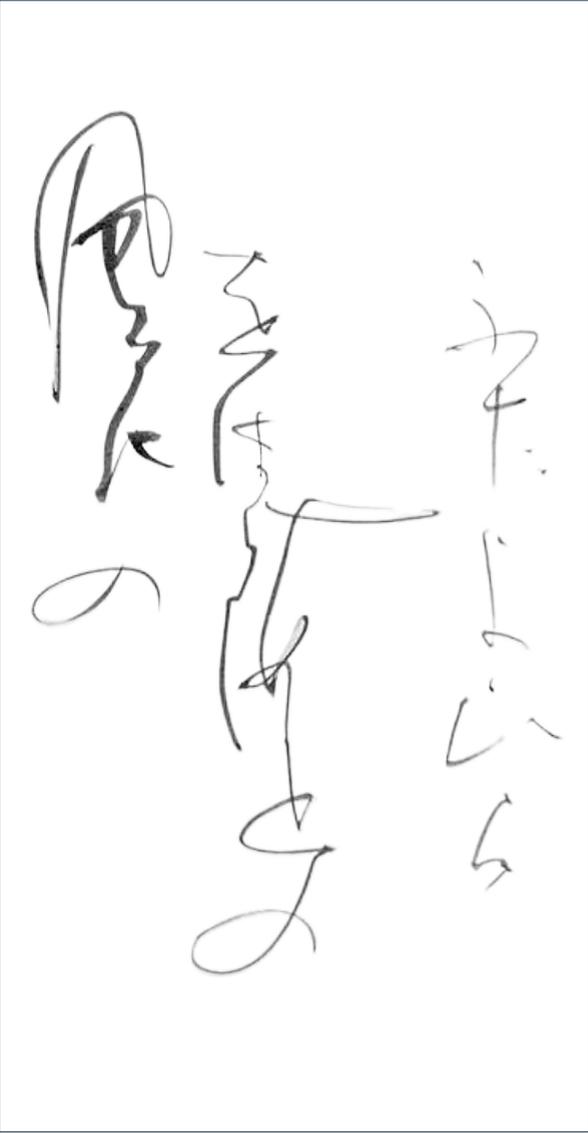
撮影：墨沱



春
蚓
烁
蛇



風花のをはりしあとのふたよひら
竹僊



あを

一月集

坐・誹

佐藤 竹僊

令和七年『あを』の表紙に寄せて

ひよつとこがおかめを圍むうららけし

山茱萸に蠟梅金縷梅ミモザの黄

狛獅子の乳飲んでをり花ふぶき

灌佛のかんばせ見んと膝を折る



昭和の塔平成の塔鯉のぼり

五月晴八十五歳と一ヶ月

仰山な蓮の臺のどれにしよ

納涼の燈の列び河を越ゆ

夕むくげ豆腐を買うて歸るさに

稻架におと血の退いてゆくところかも

土竜塚十一月の日に乾く

立像寢像どちらも辛い師走空



一葉忌

赤座典子

横風の強き高速冬紅葉

相寄りて対の陶器や寒の鯉

太やかに天へ伸び行く時雨虹

尾の先のあちこちに向く掛大根

里芋の煮くづれを待つ巻織汁

凧や手術の知らせ又一つ

ハン・ガンの童話に接す一葉忌



つるつる温泉

秋川泉

朝顔の色濃き花の暮残る

栗虫を食べて幼子よく笑ふ

夜の長しサックスの音切れ切れに

秋時雨山寺できく浪花節

秋の暮ざわめきの中「眠り猫」

杉並木歩き歩きて秋深し

木の葉舞ひ身じろぎもせず「美人の湯」



熊

七郎衛門吉保

タツチして扉開けたる熊の知恵
温暖化熊にも生きる辛さあり
へぎ蕎麦を打つ手休めて熊ばなし
熊騒動新種保険の世相かな
熊さんよ我等そんなに旨くなし
立冬や涅槃に見ゆる赤城山
凧や用の終えたり清掃車
箒からシャベルに替る神無月
五十キロ切り冬シャツのSサイズ
冬場所に祖国の青の閃けり



極月

篠田純子

歳晩や目の合ふをんな占師

土塁跡武蔵鎧の実の燈

夕風に動く浮島鯊の竿

色なき風鯊釣の人ふたり消ゆ

ゆりいてふマロニエやをら裸木へ

ごはごはと絡まるホース十二月

白物家電かがやき初むる十二月



小道

篠田大佳

金風や坂に迷ふはジユブナイル

禿げ作る深き鋏や豊の秋

紅葉狩パパとダデイと二人の子

秋しぐれ木陰に稚児をあやす親

晩秋や我が影薄き高架下

A I の嘘を支へに末の秋

冬晴れてボスの奢りの今川焼よ

破荷を背に笑ひあふをとこたち

この小道明日はなくなる冬の暮



雑詠

須賀敏子

年新た女性総理も恙無く

あの人はいつも三日目年賀状

早や五日乙女椿の咲きにけり

山火事の年を越しても鎮火せず

富士に雪降下訓練してみたい

アスパラの苗を植ゑ込む寒の晴れ

久米アナの訃報ラジオで松の内



海づくり大会

長崎桂子

妹逝くや茫然なりし十一月

不自由さ次つぎ増えて冬用意

枯れ色の始まり岸辺にぎはしき

枯れ色の川辺に遊ぶ老と幼

大粒の濃い紅色や実南天

天辺をさす実南天や逞しき

南勢に來楽しく泳ぐ渡り鳥

日燦燦ゆたかな山路みかんかな

三重県や豊かな海づくり大会



煮え花

森なほ子

新米の煮え花匙に一掬ひ

こんな日は綿虫の日と呟けり

図書館の廻らぬ椅子に文化の日

図書館の木々も電飾クレイン車

飢えつつも人里に来ぬ熊あまた

本当の嘘とは真っ赤曼珠沙華

追悼句 三句

一徹は偉人変人枯蠟螂

一徹の酒は剣菱爛いらぬ

主人無きラムプ行灯月明かり



秋収集

流れゐるものを乗せゐる秋の水
更けゆけば満月小さし風の中
森なほ子

佐藤 竹僊

夜明け迄まだ間のありぬ天の川
朝靄に秋の灯残る山の町
撓なる柿照り映える並木道
赤座典子

赤座典子

溢るるや甲府盆地の秋灯
閉会の辞母の涙す運動会
常よりもまんまる丸に月育つ
秋川 泉

秋川 泉

芋虫をからから笑ふ子供たち
芙蓉咲く大音量の寡婦の家
稲刈りの一息つきて薄荷糖
七郎衛門吉保

七郎衛門吉保



AIに騙されたかも文化の日
AIにおすすすめされて紅葉狩
ゆく秋や「おたま」佇む無縁坂
秋しぐれ非可聴音に満ちし街
うそ寒や皆まぼろしを罵倒する
秋夕焼みな傷ついてゐたんだな
秩父路や秋明菊の咲き揃ふ
秋深し村の外れに父母の墓
敷石をはき水を撒くやっど秋
名月の輝きの時うつろにて
電車こむ街も混雑祝祭日

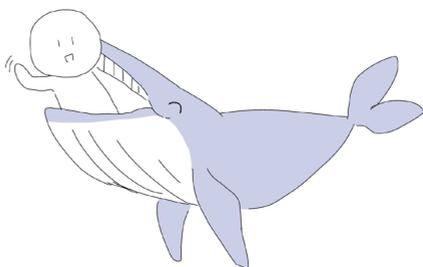
篠田純子

篠田大佳

須賀敏子

長崎桂子

喜孝抄



十一月号作品より

赤座典子・篠田大佳・佐藤喜孝

父に名を強く呼ばれし夏休

佐藤竹僊

父親に強い声で名前を呼ばれました。それが夏休みの記憶として残っているのは、普段はそういう事が無かったということでしょうか。俳誌のサロンに、作者の「肥後守まい日ながい夏休」という句もありました。非日常の中での思い出が、しっかりと感じられます。私も小学生の時に、家族で海水浴に行き、迷子になってしまい、母に大声で名前を呼ばれ、その後いたく叱られました。夏休みというと、真っ先に思い出します。(典子)

§

光景がよくわかります。子どもが名を強く呼ばれる状況は、叱られているとき、食事中に何かをしているときなど、注意力が散漫な子を集中させたい状況を想起します。作者は、たとえば、どこかに出かけたとき、今日の親が子呼びつける場面に出くわし、童心を思い出したのかもしれない。現代では、昔ほど、子どもに集中させるのは難しくなく、スマホを渡せば簡単に画面に集中してしまいます。ただ、依存性も高く、優先してやるべきことに集中力を持たない子には、今どきの大人も苦慮しているように思います。親の目線で、子に集中させる難しさの普遍性に思いを巡らせました。(大佳)

夜の帳おり風出でしすこし秋

長崎桂子

「夜のとばり」久々に優雅な言葉に出会いました。この言葉の響きが、秋の気配をひそやかに伝えてきます。この殺伐としたご時世に、このような雰囲気表現できる句を、これからも沢山拝見したいです。あくせくと落ち着かない毎日を送っている身として、心よりお願いいたします。(典子)

§

「すこし秋」が若々しい表現で魅力的。藤原敏行の「目にはさやかにみえねども」は秋の訪れを詠み識られてゐる。

久方の天の河原に渡る瀬の影見ゆるまで秋は來にけり

式子内親王

荻の葉のそよぐ音こそ秋風の人に知らするはじめなりけり

紀貫之

秋立つは水にかも似る洗はれて思ひことごとく新しくなる

石川啄木

と秋の訪れを鶴首してゐた思ひを詠んでゐる。風を夜の帳が下りた時と、繊細に捉へ下五へと続く。古歌の聴覚視覚で秋のおとずれを捉へるのと違ひ掲句は五体で捉へてゐる。(喜孝)

ピッチャーは阿修羅像似や汗もなく

森なほ子

いいですよ、興福寺阿修羅像。大好きな仏像の一つです。本当にほればれと見とれてしまいます。作者の見たピッチャーとは、高校野球の選手なのでしょうね。きりりとした若人が、汗も

見せずにプレイをしている。作者も、爽快さを十分に味わいながら、エールを送られていたこと
でしょう。(典子)

伸びるだけ伸びて溝蕎麦凭れあふ

森なほ子

わたしは「溝蕎麦」ときいて、あああの草花ね、とおもひ出せない。確か三宝寺池の清水の中に群生していたあれがさうだろう。「凭れあふ」で溝蕎麦の成長状態、群生のやうすがおのづとわかるから言葉の幹旋、働きはたのしくおもしろい。物を見て言葉に置き換へる写生句は、一枚のスナップ写真より不思議に記憶にのこる。(喜孝)

「深夜特急」読みし熱量秋の薔薇

赤座典子

『深夜特急』は、沢木耕太郎作の日本からヨーロッパまでを陸路で旅するバッグパッカーのお話です。当然、道のりがすべて安全とは限らず、危険と隣り合わせのスリリングな旅路であったと想像します。薔薇の花も、遠目で見ると綺麗な見た目ですが、近づくほど危険が多いです。旅程と季語のイメージの重なりを読みます。(大佳)

ハルウララ挑み続けて秋の声

赤座典子

「判官鼻痕」といふ言葉がある。第三者が不運な者や弱者に同情することと辞書にある。日本人

特有の感情なのであらうか。

「ハルウララ」は百十三戦○勝でも人氣があつた。一九九六年生れ、二〇二五年没。二〇〇六年競走馬としては抹消。掲句は昨年九月に没したハルウララを「秋の声」と惜しんでの一句である。牝馬でやさしい馬名も人氣の一因であらうか。二九歳といふ馬の生涯はきつと「ハルウララ」であつたことであらう。競走馬の内二〇〇三〇年の寿命を全う出来るのはわずか一〇程度といはれてゐる。(喜孝)

手のひらに皆既月食赤黒き

秋川 泉

自然を手中に収める光景ですが、内面的な表現であると思います。妖しく光る月を欲している内心には、暗く激しい感情があると想像します。作者には、赤黒い月を心の檻に閉じ込めることを表現したい瞬間があつたのだと思います。心の檻は永遠なものではありません。しかし、その瞬間には永遠のように感じられます。時間が経ち、気付けば鍵は空いており、いつかは心の檻があつたことも忘れてしまふと思います。それでも、その一瞬を記録したいのだと思いました。(大佳)

秋暑し小亀と歩く男あり

秋川 泉

おもしろい人にそして光景に遭遇したものだ。大きな陸亀が町を散歩してゐるのをテレビで見たことがある。秋暑とはいへ路面は結構熱いことだらう。そこを可愛い小亀と散歩してゐる人

に遇はれた。亀には紐でも付いていたのだらうか。伊勢物語めき「男あり」としたところも面白い。次句の

残暑をばものともせず
に亀歩む

とその亀のやうすを詠まれたのであらう。わたしも亀の散歩のお供なら出来るかもしれない。(喜孝)

花言葉 「再会」 彼岸花妹と

七郎衛門吉保

歳時記と睨めっこしていると、花言葉の謂れと縁遠くなってしまいます。花の特徴からどのような感情を得るのかというもののようで、本質的には、俳句で花を幹旋することと機能は変わらないと思いますが、歳時記と花言葉は文脈を共有していないので、花言葉の色々な意味の広がりに驚かされます。

赤い彼岸花に「再会」の花言葉があるようです。どのような理由かは断言できませんが、違う世界にいる故人と彼岸の時期に再会するからという説明がしっくり来ます。死者のことを想う時間は、生きている人間と接するより大事に感じることがあります。(大佳)

雷公の光も音も金属系

七郎衛門吉保

いかづちの光、音を金属系と詠まれた。斬新なたとへやうで感心した。吉保さんは大歳時記の最新版を手元に置かれて季語の選択に注力されてをられる様子。手元の小さな季寄せには雷公は

ない。大歳時記のあまたある雷のなかから鳴神、雷神を押しつけて「雷公」を選ばれた。雷公といふ語に惹かれたのだらう。(喜孝)

地に坐して秋空見上ぐホームレス

篠田純子

ホームレスが空の高さを見上げながら、ぼんやりと空っぽな時間を作っています。空白を埋めるように、何かしらの感情や憤りを表現しているよりも、むしろ空っぽになるための時間を作っているように読みたいです。何か用事を作らないといけない文明社会から離れて、何もしないことを実践しているホームレスの人に、人生のヒントを得られるかもしれません。(大佳)

あきあかね孫の彼女は美人とか

篠田純子

先月のトランジスタージャマーの祖母といひ身边の人を温かく見る視線しか詠めぬ作品である。「美人とか」と美人と断じてゐるわけではない。孫との会話からか、または又聞きかもしれない。孫に彼女が出来ただけでもうれしいニュース。その上……。このやうな季語から詠みはじめた句でないときは、季語を選ばなければならぬ。楽しみでもあり難しい。作者の力量が現はれる。「あきあかね」はほんわかとした絵本の中のお囃のやうに愉しんだ。(喜孝)

怒らせし肩は秋雨を受けにけり

篠田大佳

昔、高倉健さん達が活躍した、いわゆる「任侠映画」では、上映が終わり、映画館から出て来た人は、皆、肩で風を切って帰っていったそうです。高揚した気分で、肩を怒らせて歩けば、雨に濡れるのも、一層主人公になりきれたかもしれませぬ。（典子）

§

大方ルビは読み手を過保護にあつかふ unnecessary な場面が多い。この句のルビも「しゅうう」であれば要らぬお世話といふことになるが、掲句の「しゅうう」には感じ入った。「秋」「愁」の音読みの歴史的仮名遣ひでは「しう」であることを知った。「しゅうう」に比し「しうう」は鋭い響きがある。ルビを振らなくとも句意は通じるが作者は「しゅうう」が必要不可欠であつたのだ。（喜孝）

秋夕 焼け明日も静かな一日を

須賀敏子

何事もなく一日が終わった時は、本当にほっとします。昨今は、信じられないことが、あまりに多く起こり続けています。この夏、松本の縄手通りで買った、蛙ダルマに毎朝無事をお願いしています。出来ることなら、敏子さんのこの句を短冊にして頂いて、誰もが、静かな生活を送れる日がくるように、毎日、心からお祈りしたいです。（典子）

茨城や母の生家の次郎柿

須賀敏子

たつぷりとゆつたりとした詩情豊かな句である。出だしの上五のや止めも心地よい。あとは「の」

で下五「次郎柿」までゆつたりとつづく。読み返す。母の生家は敏子さんとのやうな繋がりの方が住まはれてゐるのだらうかと、要らぬことを想像し、そして一寸ほろ苦いおもひで読む。柿の種類を固定しリアル感を増す。このおもひを

緩く坂柿のなる家過ぎて橋

に重ねて読む。見事な抒情詩である。(喜孝)



季語あれこれ

新年の季語、特に動物にの項には興味あるものが多い。「しかし新年は足早に過ぎてゆき詠む期を逃します。」

《嫁が君》

明けまして壁からのぞく嫁が君	松村美智子
天井から輿入れてきし嫁が君	松村美智子
嫁が君ホモサピエンス鳩菌と	佐藤 恭子

《初声》

嫁が君当り障りの無い神社	篠田 純子
追はれたり二手に分かれ嫁が君	篠田 純子
銀座露地もつきりとした嫁が君	篠田 純子
初声を仰向きて聴く揚げ雲雀	鎌倉喜久恵
初声を聞き分けてゐる相思鳥	須賀 敏子
《初雀》	
初雀親しき声をちりばめて	鈴木多枝子

ゆるやかに飛翔のつづく初雀

佐藤 恭子

遠に聴く訛りなつかし初鴉

佐藤 恭子

いつも来る雀なれども初雀

芝 尚子

初鳥わつはあはあと銀座路地

篠田 純子

朝酒の抜けきしところ初雀

佐藤 竹僊

初鴉声の響きて夜明けかな

秋川 泉

湯ざましはひよわなる水初雀

佐藤 竹僊

《伊勢海老》

齊藤 嘉久

一群の来てみて嬉し初雀

森 なほ子

ほんものの伊勢海老飾るめでたさよ

齊藤 嘉久

ひと息もふた息も白初鴉

佐藤 恭子

斎藤嘉久さんは暖流の先輩。何で働いて暮らしてゐるか何年お付き合ひしても解らぬ不思議な人でした。あを

初鴉夢の片端きりとらる

佐藤 恭子

が発刊号掲載。街中から消えてゆく正月の飾り聖樹より影

初鴉威儀を正して欄干に

鎌倉喜久恵

が薄くなつてきたやうだ。

親しさの抗いもあり初鴉

後藤 志づ

初鴉ハタキのやうに飛んでくる

佐藤 竹僊

初鴉紐育訛議事堂訛

佐藤 恭子

《門松》

ひそやかに鳴いて正子の初鴉

佐藤 恭子

門松や川ありてこそ町遣る

堀内 一郎

電柱の取替へられて初鴉

早崎 泰江

大門松今半上野広小路

芝宮須磨子

海神に重ぬ人声初鴉

佐藤 恭子

門松とおせちの国へ飛ぶ虚空

森 なほ子

きゆるきゆると空氣軋ませ初鴉

佐藤 竹僊

《松飾》

初鴉地上ばかりを見てみたり

芝 尚子

川越や竹で造らる松飾り

須賀 敏子

うすうすと東の空に初鴉

佐藤 恭子

町内半被鳶の若衆松飾り

芝宮須磨子

武具の店昔ながらの松飾

田中 藤穂

忙しさを楽しんでゐる松飾

斉藤 裕子

退院の夫と眺める松飾

斉藤 裕子

父母よりも命ながらへ松飾り

都築 繁子

《注連飾》

篝火や竜の形の注連飾

須賀 敏子

高階に住みて玄関注連飾り

都築 繁子

《輪飾》

輪飾を花の小鉢に変へし朝

赤座 典子

輪飾を留守番にして里帰り

鎌倉喜久恵

《おさがり》

おさがりや犬もかれんなマントきて

鈴木多枝子

御降りや老いどちの足寛束な

芝宮須磨子

御降りや半蔵門へ傘の列

竹内 弘子

御降りの雪になれやとあふぐ空

佐藤 恭子

御降をちらとも見らで寿司を巻く

斉藤 裕子

アイドルはCGはだへ富正月

佐藤 竹僊

《初昔》

まつすぐな迷路でありし初昔

佐藤 竹僊

《宝船》

寶船枯野を漕いでゐるところ

佐藤 竹僊

氣遣はれ送られてきし宝船

赤座 典子

彩色の淡きが床し宝船

森 なほ子

寶船神みつしりと乗合へる

篠田 純子

宝船うっかり夢を忘れけり

須賀 敏子

良き目覚め枕の下の宝船

都築 繁子

宝船止まずの地震に帆を下ろす

七郎衛門吉保



正月は駅伝の季節である。元旦にはニュー・イヤ―駅伝。翌日から二日間箱根駅伝。京都の街を走駆する皇后盃全国女子駅伝は毎年見る。都道府県対抗でNHKの放映だが雪ゆえか画像が荒れピントが屢々合はず残念だった。

《駅伝》

駅伝の声援に振る初国旗	芝 尚子
箱根駅伝舞ふ粉雪の大写し	赤座 典子
駅伝の向かうきらきら冬の海	竹内 弘子
箱根駅伝今年限りの神の足	木村茂登子
雪頻り駅伝男子風のごと	須賀 敏子
伊勢の冬大学駅伝一途な顔	長崎 桂子
沿道のマスクの拍手大学駅伝	長崎 桂子
初春の女子の駅伝笑と苦笑	長崎 桂子
ラジオから箱根駅伝若湯かな	七郎衛門吉保
三日朝駅伝と逆箱根入り	七郎衛門吉保
駅伝を待つ街道の冬菫	七郎衛門吉保

《初富士》

初富士や真っ直ぐつづく中央線	森 理和
初富士のののひらの中三ツ峠	須賀 敏子
初富士をはるか彼方に遠眼鏡	鎌倉喜久恵
初富士や不穩の気色寄せ付つけぬ	早崎 泰江
初富士や寒林梢を明るうす	渡邊 友七
蒼穹に初富士芦ノ湖踏んまへて	木村茂登子
初富士を見しと久しき便りあり	鎌倉喜久恵
初富士は日本晴を背負って聳つ	木村茂登子
初富士のネットに受信旅ごころ	森 理和
環八より初富士くきり初墓参	斉藤 裕子
初富士に見下ろされゐて子ら遊ぶ	森 なほ子

《かるた》

三学期壁にめぐらす歌かるた	赤座 典子
花歌留多貌が見えない子が坐る	佐藤 恭子
美声には遠くなりたる歌留多かな	竹内 弘子
多感なる子の加はりし歌留多とり	竹内 弘子
わらんべにとらす接待キヤラ歌留多	七郎衛門吉保
三歳の児の意気高く初かるた	七郎衛門吉保



《羽子板・羽根》

双六に高飛びのありクルマ売り

七郎衛門吉保

器量よき羽子板かざる鴨居かな

江倉 京子

羽子板を抱く子は母に抱かれをり

鎌倉喜久恵

半纏の手で送る羽子板市

森山のりこ

羽子板市静かに誘ふ店に決め

森 理和

六人で大羽子板を担ぎ行く

森 理和

風追羽根の音なつかしむ

芝 尚子

羽子つきの聞こえぬままに羽子日和

芝 尚子

羽根を突く子などあらねど羽子日和

鈴木多枝子

羽根つきのをみな笑ひ響きけり

森 理和

羽子板市ヨイ手締めの声高し

藤野 寿子

羽子板市売手は茶髪の黒絆天

藤野 寿子

羽子板やあの頃いくさ始まりし

芝 尚子

羽子の音遠き日のことなつかしむ

早崎 泰江

羽子板市人出の上に月のあり

田中 藤穂

影の濃し突く音なくとも羽子日和

佐藤 竹僊

一月は冬と新年の季語を含む。春を感じさせる冬の季

ほろよひの伯父さん初めて読むかるた

赤座 典子

金色の歌留多敷き詰む稲田かな

七郎衛門吉保

黒髭にピンゴに歌留多初写真

七郎衛門吉保

《すごろく》

雙六の海傾けて收ひけり

佐藤 竹僊

すごろくのやうな旅なりみやこ鳥

佐藤 竹僊

絵すごろく百パーセント人は死ぬ

篠田 純子

雙六の上りのやうに浮寝鳥

佐藤 竹僊

語から選んでみました。「春近し」は素直で好きな季語です。

《春近し》

春近し川音少し華やぎて

鎌倉喜久恵

春近し和らぐ風に頬さらし

河合 笑子

知恵の輪のするりと抜けて春近し

森山のりこ

ひたすらに落羽松ゆる春近し

佐藤 竹僊

縫ひぐるみの兎と話し春近し

田中 藤穂

新調の絹の靴下春近し

森 理和

百歳を目途とし生きて春近く

堀内 一郎

春近し日差に土の割れ目かな

長崎 桂子

化石の木化石の水に春近む

佐藤 竹僊

春近しと言ふに大木横向きじゃ

佐藤 恭子

夕茜鈴鹿峰染め春近し

長崎 桂子

鈴鹿峰暁に照り映ゆ春近し

長崎 桂子

《春隣》

「春隣」を季語に据ゑてひたすら句を読む裕子さんの

一句一句を、あらためてゆつくりと熟読した。

山裾も明るさを見せ春隣

栢森 定男

謝辞述べる役終へし父春隣

赤座 典子

箒目の流れもゆるく春隣

松本 米子

川の字に寝相直せり春隣

篠田 純子

ゆつたりと母の髪梳く春隣

篠田 純子

電話の声の主を探す子春隣

江倉 京子

昨日より日射煌めく春隣

長崎 桂子

野に遊ぶ夢をみました春隣

須賀 敏子

油絵に缺さしいれ春隣

佐藤 恭子

猫の目と心の通ふ春隣

芝 尚子

さざ波の囁いてゐる春隣

山莊 慶子

春隣サーブに込むる打つチカラ

芝 尚子



朝市に店と人増す春隣

焼香の順序たがへる春隣

胃袋をカメラが捕ふ春隣

雨の日に喜劇見に行く春隣

木の虚に詰る紙屑春隣

発車ベルホロホールル春隣

白犬のたはむれはしやく春隣

御殿場のイルミネーション春隣

ファゴットの紅の美し春隣

ワンクールひとまず終へて春隣

風通りぬけきし日差し春隣

草の名のながながしきも春隣

根菜を娘と刻む春隣

長崎 桂子

篠田 純子

鈴木多枝子

篠田 純子

佐藤 竹僊

木村茂登子

長崎 桂子

須賀 敏子

赤座 典子

斉藤 裕子

芝 尚子

佐藤 竹僊

篠田 純子

声ひくくゆるゆると坐す春隣

春隣灯すことなき吊りらむぶ

木の香たつ建築現場春隣

式を待つ花嫁御寮春隣

幸せは子の笑顔だよ春隣

じっくりと子の言ひ分を春隣

春隣至福の時はと子に問はれ

ビブラフォンの桴も弾んで春隣

ミシン目のひとつ飛びをる春隣

夫と聞く手術説明春隣

頼むよと我身を摩る春隣

病して御蔭様増ゆ春隣

祈るよに待つCT結果春隣

春隣すこやか願ひ歌ふ会

伸びしたまま寝入りし猫よ春隣

耳歌てまどろむ猫や春隣

再度奮起治験同意書春隣

新築の子育て家族春隣

長崎 桂子

竹内 弘子

木村茂登子

須賀 敏子

斉藤 裕子

斉藤 裕子

斉藤 裕子

斉藤 裕子

篠田 純子

斉藤 裕子

斉藤 裕子

斉藤 裕子

長崎 桂子

斉藤 裕子

斉藤 裕子

斉藤 裕子

須賀 敏子

須賀 敏子



萎ゆる気を仕切り直すや春隣

斉藤 裕子

がある季語です。

やんはりと犬に愚痴言ふ春隣

須賀 敏子

添ひ寝の場猫に奪はれ春隣

斉藤 裕子

アカハラもシロハラもゐて春隣

須賀 敏子

自転車を外股で漕ぐ春隣

篠田 純子

正社員に登用決まる春隣

篠田 純子

夫作るスムージー甘し春隣

篠田 純子

春隣のと飴がこのバックにも

森 なほ子

声出して歌碑を読む人春隣

森 なほ子

てのひらにピンタのきおく春隣

篠田 大佳

がんばれと囃し立て拍手春隣

長崎 桂子

今朝の豫報の雪がちらつく春隣

佐藤 竹僊

銀座には「イツセイミヤケ」春隣

須賀 敏子

おやゆびの黒きマニキュア春隣

篠田 大佳

《六花》

クロールや六花烈しく窓を打つ

須賀 敏子

風花や三重なる塔の朱に塗られ

佐藤 竹僊

《風花》

「風花」は「そばえ」に似て雪や雨とは違ひはなやぎ

風花のころころと煮ゆる小豆餡

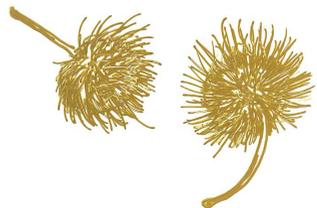
竹内 弘子

風花のころころと溶けつつも

森 理和

風花や温みのこりし握り飯

森 理和



風花や嬉しいことを思ひ出す	森	理和	妹の那須塩原や風花す	須賀	敏子
風花の舞ふ竜ヶ岳富士間近	須賀	敏子	くちびるがおもひだしたる風花を	佐藤	竹僊
風花の舞ふ竜ヶ岳富士間近	須賀	敏子	風花と奥につたへる夕まぐれ	芝宮須磨子	
風花や踊れをどれと一遍上人	森	理和	風花のころがる三十三間堂	佐藤	竹僊
風花の舞ふ竜ヶ岳富士間近	須賀	敏子	三十六峰風花ぐるりとまはり来ん	佐藤	恭子
風花や未熟なスキップ母と子と	芝宮須磨子		風花や励すことの難しき	山莊	慶子
風花や独り暮しの家ふえて	鈴木多枝子		母看取らざりし日に似て風花す	竹内	弘子
風花やしきりに矮鶏を呼んでゐる	鈴木多枝子		さあかすに風花にあふ旅先で	佐藤	竹僊
疾走の馬眩しめば風花す	鈴木多枝子		風花の舞ふ駅にある投書箱	秋川	泉
風花や出さずじまひの角封筒	佐藤	恭子	風花や一人キャンプの背のあたり	須賀	敏子
けふもまた出雲崎から風花す	佐藤	恭子	風花に雁字搦めの淨瑠璃寺	佐藤	竹僊
逢へば訣れ万の風花手に炎やす	渡邊	友七	大手門高き石垣風花す	須賀	敏子
日輪のかけらの如く風花舞ふ	渡邊	友七	風花や初のこの駅この街に	秋川	泉
風花も雪も六つの角もてる	木村茂登子		花あしび一度止みたるかぎはなが	佐藤	竹僊
山下りて風花受ける露天風呂	須賀	敏子	かぎはなのをはりしあとのふたよひら	佐藤	竹僊
軽やかにおしやべりな風花菜畑	芝	尚子	われなき間かぎはなをはる淨瑠璃寺	佐藤	竹僊
風花や熱き紅茶の紙コップ	芝	尚子	かぎはなのはじめとをはり淨瑠璃寺	佐藤	竹僊
風花や運命線をひらくとき	堀内	一郎			

(佐藤喜孝記)

あとがき

今月の表紙

近所の駐車場の花壇を撮りました。土いじりが好きな警備員さんがいるらしく、通りかかるたびに、華やかな花壇が楽しめます。(撮影：墨花)

S

今月の竹僊作品は昨年の『あを』表紙写真からヒントを得た拾二句です。今年もお願いして篠田純子さんと大佳さんの写真で飾ります。どなたか挑戦してみてください。(喜孝)

春蚓秋蛇

『the・誹』を出したところから自句を書くのに興味が出てきた。因みに句集名は雑誹から来てゐる。振り返ると私の句は正に雑誹といふ括りにふさはしいと気が付いたことから始まる。筆立には筆が沢山立ててある。絵筆まである。初学の師でもあり日本画家の武井石舛岳人の遺品といふ勿体ないことこの上ない話である。料紙は書き尽くせないほどある。書道用紙のほか仕事

で使ひ切れなかった紙を使ひ切ろうといふ楽しみを見つけた。墨は『貞香会』といふ書道団体のお墨付き。今月の料紙は間合紙で兵庫県名塩で漉かれる雁皮紙。泥を混ぜて漉かれるので数枚束ねて持つと紙らしくない重さである。この紙はその泥の中に砂鉄が混入してゐた失敗作。しかし今月号のものはそこらに有つた印刷物の裏。一番先に書いたものが気に入つてしまった。間合紙の技術は重要無形文化財に指定されてゐる。(喜孝)

二〇二六年一月号

発行日 一月十三日

発行所 〒177-0042

東京都練馬区下石神井一丁目六の三

サンハイツ石神井2 一階

電話 090 9828 4244

印刷・製本・レイアウト 竹僊房

カット／福井美佐子・ティリエイマ

会費 一五〇〇円(送料共)／一年

ゆっちょ銀行(普) (店番018) 4586402

佐藤 喜孝(サトウ ヨシタカ)

